劉琨詩小論

――「答盧諶」詩を中心として――

後藤秋正

序

晉の劉琨、字は越石の文學は、普通「文選」に採錄された三篇の詩によつて知られる。「隋書經籍志」には「晉太尉劉琨集九卷、劉琨別集十二卷」と記されてはいるが、實は、「全晉文」に著錄されている二十數篇の表・盟・誄等の文章を除けば、現在見うる彼の詩は「文選」に載せられたものがすべてである。(注11)

この稿では、特に、彼の部下であつた盧諶（二八四～三五〇）への返書として書かれた「答盧諶」を主たる考察對象とし、劉琨の文學の特質、またその源流、ひいては評價の問題についていささか論じてみたい。

一、劉琨の生涯

詩の檢討に入るにあたつて、敍述の都合上、彼の生涯についてごく簡單に述べておこう。

彼は若い時から「儁朗」の呼び聲高く、二十代の後半には石崇の金石の別莊の賓客となり、「文詠頗爲當時所許」と評され、また賈謐の二十四友の一人としても數えられるようになつた。この事實は後述するところと關連して注目されてよい。しかし、この優雅な文壇での活躍もごく短期間しか續かなかつた。八王の亂と稱される權力爭奪の內紛が勃發したからである。その渦中にあつて、張華、潘岳、陸機、陸雲ら錚錚たる文人達が非運に倒れていつた。だが彼は、その名門の出身であることも幸いして、實にうまく身を處した。惠帝の光熙二年（三〇六）、東海王越がからくも亂を平定したが、時に五胡と總稱される異民族の蜂起、侵入はすでに開始されていたのである。そのような狀況のもとで、永嘉元年（三〇七）、彼は彼の人生を根本から變えてしまうこととなつた并州刺史に任命されたのである。紙幅の關係で詳述できないが、それがどんなに困難なものであつたか、彼が赴任の途中、懷帝に上つた「爲并州刺史到壺關上表」によつて一端を窺うことができる。

道險山峻、胡寇塞路、輒以少擊衆、冒險而進、頓伏艱

危、辛苦備嘗、……目覩困乏、流移四散、十不存二、攜老扶弱、不絶干路、及其在者、鬻賣妻子、生相捐棄、死亡委危、白骨横野、哀呼之聲、感傷和氣、羣胡數萬……、それにもかかわらず彼は、よく幷州を守り、匈奴の劉聰らのために父母が殺害されるなどの痛恨事はあつたにしても、精魂を傾けて晉室に忠誠を盡くした。華北の大半が異民族の手に歸したなかにあつて、匈奴の劉淵一黨を相手に晉陽を根據地として孤軍奮闘し、一時は「流人稍復、鷄犬之音復相接矣」ほどになつた。が、結局施策(注2)の失敗から幷州を放棄し、同盟を結んでいた鮮卑族の段匹磾を頼つて幽州へ落ちのびることになつた。匹磾は始め彼を重んじていたが、晉室への忠誠を第一と考える彼とは所詮合わず、遂に彼を幽閉し、のちには殺害するところとなつた。東晉の元帝の建武二年（三一八）のことである。このような死と隣合わせの狀況にあつて彼の詩は作られたのである。先に彼の詩は三篇が現存していると述べたが、そのいずれもが幷州へ着任して以後の作品である。

二、「答盧諶」詩について

「文選」巻二十五所載のこの詩の作られた時期に關しては、「晉書」の彼の傳から、また後述する詩の内容から推して、段匹磾を頼つて幽州へ行き、いまだ幽閉されるには至つていない頃、卽ち死の前年である東晉の元帝の建武元年（三一七）とみて間違いない。相手の盧諶は幷州の彼を頼つて來て、その才能を愛されて從事中郎となり、詩の贈答の際には匹磾の別駕となつていた人物である。

さてこの詩は八首の連作からなつている。

〈其一〉には言う。

厄運初遘　厄運　初めて遘ひ
陽爻在六　陽爻　六に在り
乾象棟傾　乾象は棟の傾くがごとく
坤儀舟覆　坤儀は舟の覆へるがごとし
横厲糾紛　横厲　糾紛し
羣妖競逐　羣妖　競ひ逐へり
火燎神州　火は神州を燎き
洪流華域　洪は華域を流せり
彼黍離離　彼の黍は離離たり
彼稷育育　彼の稷は育育たり
哀我皇晉　我が皇晉を哀しみ
痛心在目　心を痛ましむること目に在り

この第一首で彼は、乾の卦になぞらえられる天は棟木の傾くようにくずおれ、坤の卦になぞらえられる地も、舟が轉覆するようにひつくり返つてしまつたと述べ、連作の前半

を流れる低く暗い基調音をかなでる。世界の文明の中心である中華の國、その具現された形としての晉朝は、彼の文字どおり必死の奮戰にも拘らずもろくも崩壞しようとしている。述べようとすることがらはあまりにも重大である。その上、この詩に付された書簡に「自頃輈張、困於逆亂、國破家亡、親友彫殘、負杖行吟、則百憂俱至、塊然獨坐、則哀憤兩集」とあるように、ことは彼自身の家族、親友の悲劇にもかかわる。晉朝の衰微を「厄運初遘、陽爻在六」という、いわば抽象的な語によつて連作を開始したのは、彼の自制心がそうさせたものであろう。書かれるべき痛恨事は數限りなくある。それを具體的に述べることはその悲劇を追體驗することに他ならない。萬物の變化を包攝すると考えられる「易」の語を使用することによつて、彼は一まずそれを回避したのである。第九句・十句は「詩經」王風の「黍離」を踏まえる。詩人が四言の形式を用いる時、まず意識にのぼるのは「詩經」であろう。そして善くも惡しくもその影響を受ける。試みに「文選」の贈答詩の部に收められる四言詩を調べてみるに、王粲、嵇康、陸機、そして盧諶のものまで含めて全九首中七首が、冒頭の句になんらかの形で「詩經」の語を借用する。これについては後述するが、この一事からしても〈其一〉における彼の「詩經」に對する意識のしかたは異質であるといえよう。ついでに言えば、先にあげた九例中の殘りの二首のうち潘岳の「爲賈謐作贈陸機」詩の冒頭は「肇自初創、二儀烟煙」と「易」を同じく踏まえている。

〈其二〉は次の如く歌われる。

天地無心　天地は心無く
萬物同塗　萬物は塗を同じうす
禍淫莫驗　淫に禍すること驗莫く
福善則虛　善に福すること則ち虛し
逆有全邑　逆は邑を全うする有るも
義無完都　義は都を完うする無し
英蘂夏落　英蘂は夏に落ち
毒卉冬敷　毒卉は冬に敷し
如彼龜玉　彼の龜と玉と
韞櫝毀諸　櫝に韞めて諸れを毀つが如し
芻狗之談　芻狗の談こそ
其最得乎　其れ最も得たるか

彼は正義感に燃えて敵に立ち向かつた。晉室に忠誠を盡くすこと、すなわち中華の地を防衛することが彼にとつて守られねばならない窮極の正義であつた。そして正義は勝利するはずであつた。逃げてはならぬ。彼はしばしばその信

念を述べる。「吾枕戈待旦、志梟逆虜」（「與親故書」）、「膽識堅定、臨難無苟免之意」（「書」いずれも「全晉文」巻一百八所收）。しかし、前述したように、奮戰のかいなく晉陽を放棄し、段匹磾に身を寄せることとなつた。

司馬遷によつて「天道」に對する深刻な疑念が表明されて以來、非運にみまわれた詩人はしばしばそれを口にした。例えば曹植は、權力によつて兄弟が引き離された時に「苦辛何慮思、天命信可疑」（「贈白馬王彪」詩）と述べた。しかし劉琨にとつて「天地の法則」などというものは疑念の餘地なく一顧の價値もないものとなつた。「天道」は明らかに非なるものなのだ。彼の抱いていた價値觀は完全に轉倒した。詩人は連續した四組の對偶によつてそれを疊みかける。結局、人間は「天地の芻狗」なのである。書簡の中で彼は、若いころ「老莊の齊物」や「阮生の放曠」を好んだが、戰亂をくぐり抜けた今となつては「聃周の虛誕であること」そして「嗣宗の妄作であること」を悟つたと述べた。その態度と「老子」の語を踏まえて「芻狗之談、其最得乎」と斷定する態度とには明らかに矛盾がある。だがその前の二句がそれぞれ「論語」の「季氏」「子罕」兩篇を踏まえるところから、對照をなすものとして「老子」を借りたものであろう。要するに詩人は「天道」の非なることを言いたかつたのである。さて、この世の「禍」も「福」も、「逆」も「義」も天によつて正當には評價されない。惡が支配する世の中で自分は何をなし得たか。正義の具現であつたはずの晉朝も、異民族の劉曜のために長安を奪われ、滅亡する破目におちいつた。晉朝を扶ける戰いは正義を正義であらしめる戰いでもあつた。自分はそれに敗れた。

〈其三〉で、彼は激しく自己の責任を追求する。

咨余軟弱　咨　余れ軟弱にして
弗克負荷　負荷に克へざりき
愆釁仍彰　愆と釁と仍りに彰わるるに
榮寵屢加　榮と寵と　屢　加はれり
威之不建　威の建たざるや
禍延凶播　禍ひは延び　凶は播がる
忠隕于國　忠は國に隕ち
孝愆于家　孝は家に愆てり
斯罪之積　斯の罪の積もれること
如彼山河　彼の山河の如し
斯釁之深　斯の釁の深きこと
終莫能磨　終に能く磨むる莫し

「贈答詩」のスタイルで書かれた詩が、ほぼ自己の感懷の表白であるという點では完全に建安詩以來の傳統にのつと

つているが、その感懐の内容はかなり異質なものを含んでいる。それは端的に言えば、すべての責任を自己とのかかわりあいに於いてとらえようとする態度である。以下その事について述べよう。

彼はまず、「咨余軟弱、弗克負荷」と、おのれの精神が軟弱であつたが故に大いなる任務をとげられなかつたという。原因を自己の精神の弱さに求めるのは、ここに初めてみられるのではない。彼は「與丞相牋」でも以下の如く言う。やや長いが「太平御覽」(注③)巻四百八十六に引くものを引用しよう。「不得進軍者、實困無食、殘民鳥散、擁髮徒跣、木弓一張、荆矢十發、編草盛粮、不盈二日、夏卽桑椹、冬則營豆、視此哀歎、使人氣索、恐吳孫韓白、猶或難之、況以琨怯弱凡才、而當率此、以殄強寇、」ここでも彼の進軍がはかどらない原因を自己の「怯弱凡才」に求めようとする態度がうかがわれる。この詩を作つた後、彼が再び盧諶に贈つた詩「重贈盧諶」では、「功業未及建、夕陽忽西流、時哉不我與、去乎若雲浮」と述べ、志半ばにして倒れるのは時運のめぐりあわせが悪かつた點に原因があるという態度を表明しているが、それはこの篇で心中にわだかまつていたものを、すべて吐きつくしたあとの一種達觀した氣分を表わすものであつて、この詩を作つた時點では、彼はひたすら自己の内面に責任を求め續ける。

この冒頭の二句の典據としては、それぞれ「漢書」と「左傳」をふまえるが、直接的には、嵇康の「幽憤詩」に極似する。その中で、嵇康は「ああ、われ云云」の句を頻用する。「嗟余薄祐、少遭不造」、「咨予不淑、嬰累多虞」、「嗟我憤歎、曾莫能儔」の如くである。たしかに「嗟我……」の句は「詩經」によく見られる句ではある。だがそれは「嗟我懷人」のようにごく普通の感情の強調としての表現であるにとどまる。しかし劉琨と嵇康のそれは共通して、志の遂げられなかつた責任を自己に求め、その自己を前に押し出す表現である點で、「詩經」と一線を畫すものである。この點についてはさらに後述するとして、彼の任務とは何であつたか。それは第一には國に忠誠をつくすことであつたのは前述のとおりである。第二には、兩親に孝養をつくすことである。「忠隕于國」とは、彼が建武元年(三一七)、元帝より名刀を賜わるほどの期待をになつていたにもかかわらず、結局幷州を保守できなかつたこと。「孝愆于家」とは、琨が寵愛した河南の徐潤なるものの讒謗を眞にうけて、よく諫言をなした部將の令孤盛を、母が「如是禍必及我」と忠告したのを聞かずに殺し、その子令孤泥のために父母ともに殺害されるといつた痛憤極りない

出來事を指す。それはすべて彼の「罪」であり「徳」であり「疊」であつて、どんなにあがなおうとしても「終莫能磨」というものであつた。國家の存亡をかけて戰つた結果が父母の死、そして自己の落魄。彼の腦裏には、「晉書」本傳にいみじくも指摘されている「琨善於懷撫、而短控御、一日之中、雖歸者數千、去者亦以相繼、然素奢豪、嗜聲色、雖暫自矯勵、而輒復縱逸」であつたことからくる後悔が渦を卷いていたことであろう。確かに彼の責任に歸せられるべきことはあつたのである。しかしそれにしても、ここに見られる自己への責任の追求は過度と言つてさしつかえない。(注4)

さて、既に嵇康の「幽憤詩」に少しくふれた。興膳宏氏はその論文「嵇康詩小論」(「中國文學報」第十五册所收)で「四言詩に斬新な改革の風を吹き込んだ嵇康の功績も、所詮彼一身の文學の内に止まるものでしかなかつた。」と述べ、「四言詩の斬新な改革」の内容として「詩經の束縛から脱した結果として、詩經的な形式をむしろ積極的に活用したこと、そして、四言詩の抒情性に思辯的な性質を導入したこと」をあげている。が、その「思辯的な性質」について考えてみるに、結局は獄舍につながれるに至つたことについての自己の責任を、多面的かつ徹底的に追求、解剖したということになろう。嵇康は「幽憤詩」で「咨予不淑、嬰累多虞、匪降自天、寔由頑疎」と、悲境の原因を自らの「頑疎」にあることを明言している。確かに悲劇的境地に陷つた際、その責任を一貫して自分に求める態度はかつて見られなかつたものである。例えば曹植に「責躬」すなわちみずからを責めるという四言詩がある。それに付せられた表の「臣自抱釁歸藩、刻肌刻骨、追思罪戾、晝分而食、夜分而寢……」からも理解されるように、かつて武帝曹操の命令に從わなかつたことへの辯明を新たに卽位した文帝曹丕に對して行なつたいわば獻詩であり、嵇康、劉琨に比してそれほど深刻に内面を追求するものではない。また、彼と同時代の詩人をあげていうならば、陸機に「贈弟士龍十首」の連作がある。そこで彼は、吳の滅亡に際し、荆州の牧であつた父陸抗のあとをついで戰つた自分の姿を追想し「顚跋西夏、收迹舊京、俯慙堂構、仰愧先靈、孰云忍媿、寄之我情」というが、かくのごとく、戰功なく吳の亡國に遭つたことを祖先の靈に恥じることはあつても、それを自己の内部に追求しようとする姿勢はない。

以上のことから嵇康や劉琨に見られる徹底した自己解剖、自己の責任追求の苛烈さといつたものが比類のないものであることが理解されるであろう。劉琨と嵇康の姿勢の

類似を述べたが、劉琨が嵇康を意識していたと考えられる節は他にもあるのである。やや大膽な臆測かもしれないが、彼は書簡で、「知聃周之爲虛誕、嗣宗之爲妄作也」と戰亂をくぐつた後の心境を述べた。何故聃周卽ち老聃、莊周に對して、嗣宗卽ち阮籍とのみ言つたのであろうか。試みに「文心雕龍」を檢してみても、阮籍に對しては嵇康が並んでとりあげられるのであつて、阮籍が單獨でとりあげられることは皆無である。「阮籍はでたらめなのだ。」という彼の感懷のうちには、嵇康はそれとは違うという意識があつたのではなかろうか。嵇康は寃罪によつて囚われ、劉琨は過大な責任を荷つて戰場にあつたという背景こそ異なれ、ともに死と隣合わせにいるという、いわば、精神の極限狀態に置かれていたという根本的な點で、劉琨の魂は嵇康と共鳴するところがあつたのである。

さて、〈其三〉の檢討が長くなつた。〈其四〉をみてみよう。

郁穆舊姻　郁穆たり　舊姻
嫵婉新婚　嫵婉たり　新婚
不慮其敗　其の敗るるを慮らず
唯義是敦　唯だ義のみ是れ敦しとす
裹粮攜弱　粮を裹(つつ)み弱きを攜へ
匍匐星奔　匍匐して星のごと奔る
未輟爾駕　未だ爾の駕を輟(とど)めざるに
已隳我門　已に我が門を隳(やぶ)る
二族偕覆　二族は偕に覆へり
三孽竝根　三孽(げつ)のみ竝びに根づけり
長慙舊孤　長く舊孤に慙(そむ)じ
永負寃魂　永く寃魂に負けり

詩人の視點はやや轉回し、家族がほぼ全滅のうき目にあつたことをいう。「舊姻」は、琨の妻が盧諶の從母であつたことを指す。「二族」「三孽」については誰を指すかについて説が分れるが、とにかく彼はまだ記憶になまなましく燒きついている家族全滅の悲哀を再びかみしめる。國家に對する忠誠も實らなかつたのみならず、彼の責任によつて罪なくして害された父母や甥らに對して、永遠の責めを負うことになつたのである。全八首のちょうど前半の部分で彼の身をひき裂かんばかりの告白は終る。

さて〈其五〉からはかなり趣の異なつたものとなる。

亭亭孤幹　亭亭たる孤幹
獨生無伴　獨り生じて伴無し
綠葉繁縟　綠葉は繁縟にして
柔條脩罕　柔條は脩罕なり

朝採爾實　朝に爾が實を採り
夕捋爾竿　夕べに爾が竿を捋る
竿翠豐尋　竿翠は尋に豐ち
逸珠盈椀　逸珠は椀に盈つ
寔消我憂　寔に我が憂ひを消し
憂急用緩　憂ひ急なるも用つて緩くす
逝將去乎　逝きて將に去らんとするや
庭虛情滿　庭は虛しくして情は滿てり

この篇の一・二句目及び八句目に、李善がそれぞれ「孤幹孤生之竹、以喩諶」「珠卽以喩德也」と注するように、一篇は贈る相手である盧諶を亭亭とそびえる竹に喩え、四禪のもとへ去つて行くことを嘆くものである。が、最後の二句がなければ、この詩は竹を歌つた詠物詩の如き感がある。そして八行にわたる比喩の連續は詩人が冷靜さをとりもどしたことを示している。つまり〈其四〉までに、心のわだかまり、自己嫌惡をすつかり吐き出してしまつた彼にとつては、彼が四面楚歌に陷つた時に、段匹磾のもとへ去るという、見方によれば背信行爲とさえ言える盧諶の行動も今や冷靜に見つめることができるのである。確かに、親しい人間をすべて失ない、今また信頼をおいていた盧諶に去られることは彼にとつて悲哀を一層かきたてる出來事であつたに違いない。がもはや一種のカタルシスを經過した彼にとつてそれは大きな問題ではない。「逝將去乎」の句、「詩經」魏風の「碩鼠」をふまえるが、その「逝將去女、適彼樂郊」の傍點部を意識しているとすれば、「重贈盧諶」の結句「何意百鍊剛、化爲繞指柔」と同じく暗に盧諶の變節を皮肉る表現となる。

さて、この詩の構成について、沈德潛は「越石英雄失路、萬緒悲涼、故其詩隨筆傾、吐音無次、讀者烏得於語句間求之」といい、彼自身も書簡で「不復屬意於文、二十餘年矣、久廢則無次」というが、〈其四〉で初めて盧諶に言及し、〈其五〉に至つて本格的に盧諶が彼のもとを去ることを言うあたり、巨視から微視への轉換とあいまつて、「吐音無次」などというものではなく、緊密な結構をもつことが知られる。

〈其六〉は本文は省略するが、「茂彼春林、瘁此秋棘」と、反劉聰勢力の中核として今や日の出の勢いである段匹磾と、敗軍の將である自己とをひきくらべつつ、盧諶を鳳凰に喩えてその高潔なさまを歌うものである。

〈其七〉は以下の如くである。

音以賞奏　音は賞せらるるを以て奏し
味以殊珍　味は殊なるを以て珍とせらる

文以明言　文は以て言を明らかにし
言以暢神　言は以て神を暢ぶ
之子之往　之子之き往きて
四美不臻　四美臻らず
澄醪覆酳　澄醪には酳を覆せ
絲竹生塵　絲竹には塵を生ず
素卷莫啓　素卷も啓くこと莫く
幄無談賓　幄には談賓無し
既孤我德　既に我が德を孤にし
又闕我鄰　又我が鄰を闕けり

盧諶が去つた後には、何の歡びもないことをいい、第一句と第八句、第二句と第七句、第三句と第九句、第四句と第十句がそれぞれ對應關係にある。「音以賞奏、味以殊珍」は昔、貴族的な生活を送つた彼の平生の好みを知るに足るが、文について觸れるのは、この連作のうちこの篇のみである。「世說新語」言語篇には劉琨が、自らを班彪、馬援に喩えた逸話を收める。當時の風潮からして當然彼も機知に富む言語を好んだだろうが、「文以明言、言以暢神」の句、連作中の語として讀めば、どんなに激しい痛恨であろうと、一旦表現してしまえば、それはそれとして精神を淨化することになるのだと言うようにとれる。最後の一聯は

「論語」を踏まえる。「德は孤ならず、必ず鄰あり。」とはいうものの、すでに不德の故に孤獨である自分は今や、良き鄰人であるあなたさえも失つてしまうのだ。先に後半に入つて冷靜さを取り戻したと言つたが、「既孤我德」の句、まだ暗い影をひいている。

〈其八〉で彼の長い詠嘆は終る。

光光段生　光光たり段生
出幽遷喬　幽より出でて喬きに遷る
資忠履信　忠を資り信を履み
武烈文昭　武は烈しく文は昭らかなり
旂弓騂騂　旂弓　騂騂として
興馬翹翹　興馬　翹翹たり
乃奮長縻　乃ち長縻を奮ひ
是轡是鑣　是に轡し是に鑣せんとす
何以贈子　何を以つてか子に贈らん
竭心公朝　心を公朝に竭くせ
何以敍懷　何を以つてか懷ひを敍べん
引領長謠　領を引きて長く謠はん

前半、段匹磾を「資忠履信、武烈文昭」と賞讃する。これは匹磾に對する讃辭であるとともに自己のあるべき姿を投影させたものであろう。しかし、彼は全面的に段氏を信頼

していたわけではない。「晉書」本傳は次のように言う。「初琨之去晉陽也、慮及危亡而大恥不雪、亦知夷狄難以義伏、冀輸寫至誠、僥倖萬一、每見將佐、發言慷慨、悲其道窮、欲率部曲死於賊壘、……」。當面は共通の敵である劉聰一黨を倒すという點で一致していても、北方に於ける晉朝の勢力回復を計る彼と、異民族の間に覇權を打ち立てようとする匹磾とでは窮極のところでは一致できないことを彼は洞察していたのである。にもかかわらず敗殘の身となつた彼には、匹磾が「資忠履信」ことを期待し、盧諶に對しても、匹磾に精一杯仕え、彼の逐げられなかつた志を受け繼いでくれと祈るしかなかつたのである。述べても述べ盡くせぬ「哀憤」を籠めたまま、彼は長篇を結ぶ。

この詩の檢討を終るにあたつて一まず整理すると以下のようになろう。第一に、劉琨は文壇から孤絶した詩人であるといわれた嵇康の、「幽憤詩」に代表される激しい自己追求の姿勢を受け繼いだこと。第二に脈絡もなく激情のほとばしるままに書き綴つたかに見えるこの詩も、實はかなり意識された緻密な構成をもつこと、である。また、劉琨がこの作品に用いた四言體について言えば、四言體の詩は「詩經」の拘束を受け易いのであるが、とくに前半四章において、彼はこの詩體を實によく活用している。また、鍾嶸が「詩品」の序で「夫四言文約意廣、取效風騷、便可多得、每苦文繁而意少、故世罕習焉」というように、四言體の詩は、ややもするとその文飾ばかりが繁雜で含蓄に乏しいものになりがちなのであるが、劉琨の場合は決してそうではない。鍾嶸のいう「文約意廣」つまり簡約な表現のうちに深い情感をこめられるという四言詩のもつすぐれた特質を、彼は戰亂を經過した自我を前面に押し出すことによつて充分に發揮したと言える。だが過剰なまでの自己內部への責任追求は、皮肉なことにこの詩が「重贈盧諶」詩とくらべてほとんどとりあげられないという結果をもたらした。愛國の英雄とされた彼にしてこのような作品があることは、そのイメージを妨げるものと意識されたからであろう。

三　劉琨の評價について

「文心雕龍」才略篇では劉琨と盧諶に觸れて言う。「劉琨雅壯而多風、盧諶情發而理昭、亦遇於時勢也」。「雅壯」の語はここにしか見えないが、「雅」については樂府篇に、「雅聲」「雅頌」「雅章」などの形で見える。「雅聲」に對しては「溺音」の語を配することから考えて、劉勰の「雅」は「詩經」以來の正しい傳統を踏まえていることと理解される、「多風」の「風」については問題がある。興膳宏氏譯注

（「筑摩版「世界古典文學全集」第二十五卷）では、「諷刺に富み」とするが、つとに小守郁子氏[注6]が指摘するように、現存する劉琨の詩文を讀んでも「諷刺」と解するのは當を得ない。氏のことばを借りれば「抒情の眞率性」と解するのが妥當であろう。卽ち劉勰は劉琨の文學について、正しい傳統につとつていて壯大であり、なおかつその抒情が胸臆からまつすぐにほとばしり出ていることに價値を認めたのである。またそれが動亂の時代に巡りあつた結果であるとするのも、彼の書簡を考えあわせてみて、まことに當を得た指摘であるといえる。

さて「詩品」は劉琨を中品に置き、その源流にもふれて「其源出王粲、善爲悽戾之詞、自有清拔之氣、琨既體良才、又羅厄運、故善敍喪亂、多感恨之辭……」と評す。鍾嶸は源流を王粲に求めるが、王粲を源流とする詩人は「詩品」では劉琨以外にも潘岳、張協、張華らがいる。王粲について鍾嶸は、「其源出於李陵、發愀愴之詞、文秀而質羸」といい彼に感傷過多の側面があることを認めている。しかし「愀愴」については劉琨の評にある「悽戾」の語と對應しており、鍾嶸が、戰亂を經驗した二人の悲愁にその共通點を見出したことは間違いない。また、「清拔」の語は、下品に置かれる梁の虞羲（字は子陽）の評にも「子陽詩、奇句清拔」と見えている。「文選」所載の虞羲の「詠霍將軍北伐」詩を見ても、齊梁の時代風潮とは一線を畫するような力強さが確かに認められる。則ち「清拔」とは、時代を超越するようなすがすがしい氣韻をもつことを言うのであろう。だが結論としては、鍾嶸も劉勰と同じく、戰亂という「厄運」（この語、「答盧諶」の冒頭の句「厄運初遘」を意識するであろう）に罹つたことを彼の詩の原點と見做す點で軌を一にする。結局、彼が「雅壯而多風」であり「清拔之氣」を有していたのは戰亂の渦中にいたからだということになる。この點は疑義を呈する餘地はない。しかしその源流については疑問が殘る。確かに後漢末期の戰亂と荒廢を目のあたりにした王粲と、身命を賭して晉朝に忠誠を盡くした劉琨とは、戰亂を經驗した點では同じであるとはいつても、戰亂に對するかかわり方は全く違うのである。「答盧諶」〈其三〉で詳述した如く、その文學の特質は嵇康をぬきにしては考えられない。「詩品」は五言詩だけを對象としているとはいえ、この邊りの分析は表面に流れているきらいがある。もつとも鍾嶸は「詩品」序で劉琨にふれて、玄言詩の潮流に抵抗した詩人として「劉越石、仗清剛之氣、贊成厥美、然彼衆我寡、未能動俗」とした指摘は確かで鋭いものである。時代の風潮に染まらない人間はいるものな

のだ、しかしそれは結局、主流とはなりえなかつたと鍾嶸は言う。異民族に中原が蹂躙される時代に、果敢に立ち上つた劉琨にしてはじめて時代の風潮から群を抜くことができたのである。さて最後に最近の評價について簡單に述べよう。それは二つに分れる。一は彼を愛國の英雄としてだけ見て、彼の悲哀を捨象してしまうもの、もう一は、對句のつたなさなどを言つてその文學上の價値を認めようとしないものである。これは彼を總合的にとらえきれないところに原因があろう。ましてや建安の餘風ありなどといつて片づけてしまつてはそれこそ「答盧諶」詩に見た彼の特質を無視することになろう。

結語

その孤立性の故に劉琨は後世、人々の意識にのぼることはそう多くはなかつた。しかし「厄運」にかかつたことが彼に特色ある文學を形づくらせた、その「厄運」のゆえに、中原の地が幾度目かの動亂に見舞われた時、彼を的確に理解し、評價した詩人があらわれたのである。蒙古によつて祖國金の滅亡を經驗させられ、また兄の元好古を虐殺された元好問は次の如く歌つた。(注⑦)

曹劉坐嘯虎生風　曹劉坐嘯して虎風を生じ
四海無人角兩雄　四海　人の兩雄に角する無し
可惜幷州劉越石　惜しむべし幷州の劉越石
不教橫槊建安中　槊を建安中に橫たへ教めざりしを

ちなみに彼の出身地である忻州は、劉琨が心血をそそいで守り、そして痛恨の涙を流さねばならなかつたいにしえの幷州の地である。

（大學院博士課程）

注

(1) 「全漢三國晉南北朝詩」には、もう一首「胡姬年十五」という作品を收めるが、彼の作とするには疑問が多い。

(2) 岡崎文夫著「魏晉南北朝通史」では、異民族を內地へ引き入れたことを劉琨の最大の失策とするが、侵入の勢いは彼一人の力では食い止められない所まで來ていたのである。

(3) 「北堂書鈔」卷一百五十六に引くものと文字に若干の異同があり、「營」は「太平御覽」には「營」に作るが書鈔によつて改めた。

(4) 「世說新語」尤悔篇にも同樣の逸話を載せる。

(5) 例えば李善は「三孽」について「琨の兄の子」、「劉聰、劉曜、劉粲」と二說を並べる。

(6) 一九七一年度「名古屋大學文學部研究論集」所收の『『風骨』論』

(7) 「論詩三十首」其二。文天祥にも「劉琨」詩一首がある。

附記　本論については、入谷仙介氏「古詩選」（朝日新聞社・中國古典選13）に啓發される所が多かつた。